特集 1

A 面の特集趣旨：
災害／緊急事態とアート――東日本大震災から 10 年を経て

有　馬　恵　子
（立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会）

本特集は、2021 年 3 月 17 日におこなわれたシンポジウム「東日本大震災。百年経ったら――記憶・継承・忘却――」をもとに再構成したものである。第 1 部と第 3 部は、必要と思われる固有名称等に脚注を入れるなどの作業をおこなった。第 2 部は各登壇者に原稿を委ね、必要に応じて図版や脚注などを補った。以下では特集内容を要旨としてまとめ、企画の経緯を制作ノートとして記したあと、結びに本特集の意義について述べる。

1．本特集の構成と要旨

本特集は、第 1 部対談、第 2 部講演、第 3 部討論のシンポジウムのプログラムに沿って、3 部で構成される。以下は特集の要旨である（敬称略）。

第 1 部は音楽家の大友良英と現代美術作家の藤井光による対談録である。前半は 2 人が製作にかかわったドキュメンタリー映画を軸に「プロジェクト FUKUSHIMA!」の活動を振り返る。震災後に福島で活動を始めた経緯について大友は、「日本」や「福島」の「絆」という物語ではなく、DOMMUNE での配信や音楽フェスなどのネットワークにより内外に具体的につなげる経緯を述べている。藤井と大友は、映像を通して震災を国内外に伝えるという視点を共有していた。福島で育った大友は、福島という地域、福島に住む人という実在と、外へ向かう／外からの活動とのあいだにはズレが生じることにも気づいていた。一方で藤井は「福島」が日本という国家のプロパガンダへ回収されることから距離を取り、映像を通してズレをつくろうとした。だが大きな物語から意図的に外れている「プロジェクト FUKUSHIMA!」の活動と映像は、共感と批判とにさらされることになる。対談ではそのような状況下での音楽や映像、不謹慎さを含む表現のあり様について確認される。後半は「プロジェクト FUKUSHIMA!」以外の大友の震災以降の活動を紹介する。

第 2 部は水出幸輝、飯田豊、藤井光の講演録である。

まず水出は、災害を時間的・空間的な〈点〉ではなく時間軸という〈線〉として捉えなおす視座を提出する。具体的には関東大震災の〈災後〉における震災に対する記憶と認識の変化と忘却のプロセスを述べる。さらに「災害の日」という記念日をめぐる想起と忘却のメカニズムを指摘し、「災害の記憶」が社会に定着するロジックを提示している。

次に飯田は、メディア研究の立場から「プロジェクト FUKUSHIMA!」における市民協働を「コミュニティメディア」として捉える視座を提示し、1980 年代のコミュニティメディアであるケーブルテレビから影響を受けたアート・都市計画・社会学の具体的な事例を展開する。本稿を通して飯田はコミュニティメディアとしての「プロジェクト FUKUSHIMA!」のポテンシャルを提示する。

藤井はまず、南相馬の映画館を主題とした映画「ASAHIZA」について、住民の声をもとにして地域の物

語を撮ることにより、原発とは別の視座から地域に内在する構造的な問題へアプローチするあり様を提示する。最後に2021年に発表した近作においては、「圏外」「圏内」の相互の立場性を転換して新たな認識と関係性を創出することにより、福島以来課題としてきた差別に対する葛藤を作品として表したことを明らかにする。

第3部は登壇者と司会者全員による討議録である。冒頭で大友と藤井は「差別」の議題にふれ、オルタナティブメディアはマージナルな声を聞き、扱うことができると指摘する。マーティン・ロートと飯田と水出は「忘却の能動性」と取捨選択の問題と、忘却に対して想起、記憶に対して忘却が繰り返されるという転換と変容の問題に対する研究者の立ち位置を問う。美馬達哉は結果として提示された映像とその「プロセス」、体験しうるイベントと記憶との「切断」とズレの問題を大友と藤井がどのように見ているのかを議題として示し、全員で議論が展開される。最後に視聴者からの質疑を受けて、閉会となった。

2. 制作ノート

本企画の経緯が本特集の趣旨と直結しているために制作ノートを記しておきたい。本企画はドキュメンタリー映画「プロジェクトFUKUSHIMA!」を、震災から10年後の2021年、京都にて上映しようとしたことが起点となっている。2020年4月、私は藤井と「プロジェクトFUKUSHIMA!」の立ち上げメンバーである大友に連絡を取った。大友とは研究活動以前の2013年から、藤井とは2016年に仕事をともにする機会があり、コロナ禍での近況も気になっていた。連絡を取ると藤井は、映像は海外を含むいくつかの都市で上映されたものの、近年観る機会が失われているという。大友は、これまでは震災を思い返すのが辛く、観ることができなかったが、震災から10年が経過し、映像を観て藤井と対話したいとの思いを持たれていた。

このように始まった企画であるが、上映の場を見つけるのは困難であった。当初目論んでいたミニシアターは、新型コロナウイルス感染症の影響に加えて、震災関連の企画は集客が見込めないという。そのような中で2020年7月、博士予備論文（修士論文に相当するもの）の構想発表会が対面でおこなわれ、半年ぶりに大学に行く機会があった。その日校外の道ばたでの美馬との立ち話から、企画は一気に前へ進むこととなる。

美馬からは、アートイベントとしての上映だけではなく、大学院での研究の一部として、アートと研究をテーマにして研究者との討論の場にしてはどうか、映像をさらに相対化して捉えるために「100年後」からバックキャストして震災から10年の今を考えてはどうか、内容として生存学研究所との共催が可能ではないか、と提案があった。その上で、講演者としてはメディア論に造詣の深い本学教員の飯田豊と災害とメディアを論じる若手研究者として水出幸輝に打診をすることにした。だがコロナ禍で大学は立ち入りが制限されており、イベントを実施するための場所の確保は厳しい。その頃私は、研究と並行して「KYOTOGRAPHIE　京都国際写真祭」で働いており、KYOTOGRAPHIEを巻き込んだ運営を目論んだ。状況次第ではシンポジウムの実施は困難が予想されるが、KYOTOGRAPHIEはコロナ禍で会期を変更しつつも、しぶとく開催へこぎつけており、いかようにでも対処法を見つけられると現場で得た経験値による確信があった。幸い、大学外で実施することについて、大学の理解も得られた。チラシの制作を大急ぎで進め、各所と調整しながら企画は実現へ向けて加速していった。

シンポジウム当日、登壇者は京都市の出町桝形商店街にある「DELTA / KYOTOGRAPHIE Permanent Space」で一堂に会した。新型コロナウイルス感染症に対する大学の行動指針にしたがい会場は無観客とし、オンライン配信による開催とした。参加申込者には映画「プロジェクトFUKUSHIMA!」を事前に視聴してもらうこととし、映像のリンクを配信した。申込者は約200人。大学・教育関係者のほか、ライブハウスの関係者や一般の方などの幅広い層が参加した。

3. 結び

本特集のねらいはシンポジウムの場では拾いきれなかった議題を読み返すことにより、議論の場をあらためて生起することにある。震災直後と10年後では「何か」を捉える視点は変化する。今回の異種混合的な特集は、アーティストと研究者の知の枠組みを多種多様な角度から拵える場となったのではないだろうか。本特集では、ともすれば震災とアートは統治する権力側にも使い勝手の良い物語を提出することを指摘している。権力に対する番犬でありともに抗う隣人[1]として、議論を通した思考の機会を引き続きどのように創出しうるのかは残された課題である。

最後にこのシンポジウムと特集は、生存学研究所事務局に共催いただき成立した。ウェブでのイベントに不慣

れな中で実現にご尽力いただいた生存研事務局の方々にあらためてこの場を借りてお礼申し上げたい。また、この一部は、挑戦的研究（萌芽）「マイノリティアーカイブの構築・研究・発信：領域横断的ネットワークの基盤創成」（19K21620、代表：美馬達哉）の支援を受けている。チラシデザインの西頭慶恭さん（UMMM）、チラシと特集の編集協力の森かおるさん、オンライン配信の髙橋弘康さんらの技術がなければこの企画は実現できなかったと思う。会場となったKYOTOGRAPHIEの共同代表仲西祐介さんは、コロナ禍で懇談会が不可能な状況を察知し、終了後の会場で即興的に飲み物を振舞ってくださった。その鮮やかな手つきは彼らが現場で培ってきたプロフェッショナリティであり、それがなければ私たちは、オフィシャルな議論以上に有益な対話の場を持つことはできなかった。心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

注

1）「権力に対する番犬でありともに抗う隣人」については本特集の飯田論文で論じられている。